
朝焼け

花浅葱羽羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朝焼け

【Nコード】

N2871L

【作者名】

花浅葱羽羅

【あらすじ】

小人のリ口君と私のとある朝の出来事。

まだ暗い夜明け前。

はあ

と、息をはくと、息は白くなった。

何十年も、溶けることのない万年雪と氷に閉ざされていたこの小屋に住み始めて、もう五年がたっていた。冷たい小屋の空気の中で、ぐいっと手足を伸ばしてから私は着替えて朝食を作り始める。

とんとんっ

扉を叩く音がした。私は手を拭いて扉を開ける。

がちやっ

「お姉さんっ」

「やっぱり、リロ君だったんだ。」

「うん。おじいちゃんがお姉さんのつくったココの実のお酒飲みた
いっつっ」

リロ君は私のひざくらいの背丈の小人の男の子で、結構近くの小屋に住んでいる。

とても優しい子で、人の頼みはなかなか断れない子なのだ。

「そうだ。1人も寂しいし、一緒に朝ごはん食べよ」

「…いいの？」

「もちろん」

私はリロ君を家の中に入れてあげる。

リロ君はこうやってたまにご飯を食べるのでリロ君用のいすが置いてある。

リロ君はそこにすぐに座ろうとせず、私がご飯を作っているのを見てから、お手伝いある？と、聞いてくる。本当にいい子なのだ。

「じゃあ、お皿運んでくれる？」

「うん！！」

リロ君が一つ、私一つ朝ごはんがのったお皿を運ぶ。

運んだらいすに座って手を合わせて

「いただきます」

…

「おいしかったあ」

「多めに作っておいてよかったあ」

「「ごちそうさまでした」

リロ君を扉までおくる。

かちやっ

リロ君が扉の前でぺこりと頭を下げた言う。

「ごちそうさまでした！」

「ごちそうさ一緒に「ご飯食べてくれてありがとう。はい、ココの実のお酒」

「ありがとうっっっ…あっ」

「？」

「見てっお姉さん朝焼けだよっ」

「わぁ…いつ見ても綺麗ね。」

「うんっじゃあねお姉さん！！」

「ばいばいまたね。」

「ばいばーいっ」

リロ君が朝焼けの中を走っていった。

とある日の朝の出来事。

(後書き)

二年ぐらい前に書いたものです。書き方が古いような…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2871/>

朝焼け

2010年10月17日03時11分発行